

本を選ぶ

高校図書館版

NO.64 2017年(平成29年)11月20日
<http://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス
〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

図書館での霊長類学との出会い

勤務先で本を読んでいる高校生の姿を見ると、自分の高校時代を思い出します。私が夢中になっていたのは、サル学の本でした。

河合雅雄先生の『ゴリラ探検記』(筑摩書房/1977)、『ニホンザルの生態』(河出書房新社/1981)、『霊長類学への招待—サルからヒトへの進化をめぐる』(小学館/1984)など。今や『河合雅雄著作集(1)~(8)』(小学館/1996-1998)に収められた書籍の数々が、当時は単行本で高校図書館に置いてあり、むさぼるように読んだものでした。

その頃の私にとって、「京都大学」は難関大学というイメージしかありませんでした。せっかく難関校に入ったエリートなのに、ジャングルの中の道なき道を歩いてゴリラを追いかけたり、糞を拾って歩いたり、ニホンザルの食べ物や人間関係(ならぬサル関係?)をひたすら観察したり、「おもしろい人たちがいるなあ」というのが最初の印象でした。京大総長の山極壽一先生がおっしゃる「おもしろい」大学、そのままです。それから、第二次大戦の戦争体験を原点とし、サルを研究することで人間とは何かを研究する霊長類学は、日本のお家芸で、世界をリードしている事も、図書館で学びました。

卒業後は英米語学科に進んで高校の英語教員にな

り、霊長類学との縁はすっかり切れてしまいました。

高校卒業後15年ほどたって、求職中に、「英文学術雑誌編集事務」の求人広告を見つけました。「これって、高校の図書館で読んだ、あのサル学の?」と思ったら、その通り。霊長類学の学術誌の仕事に就いて、初めて知って驚いたこと。なんと、高校時代に本で読んだ「幸島のサルのイモ洗い」の最初の論文は、その学術誌『プリマーテス』に掲載されたものだったのです。職場でバックナンバーを見て感激し、さらに2010年に京都で開催された国際霊長類学会では、当時のフィールドノート(実物です!)の展示を見て感激しました。高校時代に読んだ本の著者、河合雅雄先生にもお目にかかる機会があり、まさか、高校時代の図書室のあの本たちと、私の人生にこんな接点があるとは、思いもよらず、不思議な縁を感じました。

霊長類学の研究者は、とても気さくな方が多く、理系でない高校生が読んでも面白い本がたくさん出ています。山極壽一『「サル化」する人間社会』(集英社/2014)、中道正之『サルの子育て ヒトの子育て』(角川新書/2017)、古市剛史『あなたはボノボ、それともチンパンジー?』(朝日新聞出版/2013)など。

西田利貞『人間性はどこから来たか—サル学からのアプローチ』(京都大学学術出版会/2007)は、もう少し専門的ですが、この本を読むと、人はなぜ太るのがわかります。大学の教育心理学講義で最初に習う狼少年の話が、冒頭でいきなり否定されていて、教育学の常識とは違う視点が、学校の先生にもおすすりめです。(芝田民子:高校非常勤講師)

高校図書館を舞台にした2冊の本をめぐる

坂部 豪

今、学校図書館が熱い

中島みゆきの「時代」に「そんな時代もあったね」という一節があるのは周知のことだが、2冊の学校図書館の本を前に、自分の高校生だった頃や就職した頃を思い返して、「そんな時代もあったね」と呟かずにはいられなかった（中島みゆきの歌詞は、そんな日が来るに違いないということだから、まだ来てはいないのだが）。

2冊とも、一人一人が自分自身の興味や自分らしさを携えて、自分なりの言葉を持って、どのように本と関わっているのかを具体的に語っている。だから、面白い。

北海道札幌のベテランの学校司書、成田康子さんの『高校図書館デイズ—生徒と司書の本をめぐる語らい』（筑摩書房／2017）では、学校図書館に集う高校生と卒業生13人の、それぞれの人生が語られる。決して、大げさな物言いではない。本との付き合い方を丁寧に語ってくれる彼らの姿勢は真摯で、まさに人生を語っている。自分にも同じようにいろいろと考えていた時代があったと昔を思い出した。

たとえば、文庫版の札幌市内の地図を携えて、自転車で市内を駆け巡る菜々美さん。「心を抜く」ために自転車に乗るという。その度に地図が青く塗られていく。抜くって、どんな感じかな。何となく分かるような気もする。ダイビングの耳抜きのようなものと考えればいいのでは。ちょっと詰まったものを、解放してやるというところか。

彼女が自転車に乗ったり、歩いて、抜くことができない時は、本を読むという。「読書ノート」をつけながら。そんな彼女が高校生直木賞の選考に高校の代表として参加した。そこで、候補作について心を開いて全国の高校生と話し合った経験を熱く語っている。

あるいは、幼い頃から「文字」萌えの書道部員、森羅くん。「レインボー漢字辞典」に始まり『康熙字典』に至る彼の辞書遍歴を聞くと、辞書一冊一

冊への愛情が感じられる。彼が文字に対する興味をどのように持続させ、その道を究めていくのか、今後も話を聞いてみたいものだ。

また、SF小説について熱く語るのは梅本くん。世界史と関連させて、SFを論じる彼の心は熱い（と思う）。しかし、クールに自分の脚で立って、物を考えるために、彼は本を読む。

本を読むきっかけは様々だし、四六時中読んでいるというわけでもない。でも、みんな、司書の成田さんのサジェスチョンを大切にして、自分なりに本と付き合っている様が窺える。

文章を書くということは、ある意味自分を曝すということである。自分自身の内面を暴露すると、ひりひりとした痛みを伴うことが多い。この本では、成田さんが彼らに代わって語っているのだが、痛みを耐えて、本との関わりを披露してくれた、一人一人に感謝の言葉をおくりたい。

そんな時代

僕が高校生だったのは半世紀も昔。SF少年だった。SFにめざめたのは、小学生の頃、貸本屋で借りた本だったと思うが（公共図書館は身近にはなかった）、6年生の頃、SFマガジンに連載されていた、小松左京の『果てしなき流れの果てに』を読んだのを覚えている。

ただし、SFマガジンを本屋で買うのは大変だった。本屋の平台でSFマガジンの隣にSMマガジンが並べられていたのだ。しかも、人目を避けるように店の奥だ。SMが何のことだかよく分からなくても、怪しげな物だという嗅覚だけは働く。本屋のおやじさんもSFがどんなものか知らなかったのだと思うが、本当にドキドキした。

そんな根っからのSF好きにとっては、物事の興味もSFがきっかけとなる。たとえば、ウィルマー・H.シラスの『アトムの子ら』（早川書房）を読んで、心理学なる学問に憧れて、大学では心理学を専攻した。



あるいは、ヴァン・ヴォークトの『非(ナル)Aの世界』と『非Aの傀儡』(東京創元社)である。この中に出てくる一般意味論なる理論が気になった。ただし、SFの道具立てとしては、ドリトル先生が月へ行くのと同じくらい怪げな理論だと思うが。

調べてみると、岩波書店発行のS. I. ハヤカワの『思考と行動における言語』という一般意味論の本を知り、それをきっかけに言語の問題に関心が移り(ただし、一般意味論自体は言語学の意味論とは別物。どちらかという、プラグマティズム)、大学の卒論では心理言語学のテーマを取り上げ、その後もずっと言語について考え続けている。そんな時代もあった。

学校図書館入門

埼玉県のベテランの学校司書、木下通子さんの『読みたい心に火をつける!—学校図書館大活用術』(岩波書店/2017)では、木下さん御自身の学校図書館奮闘記が語られる。かつ、彼女の実践を通して、学校図書館の入門書にもなっているところが味噌である。僕にはレイ・ブラッドベリの『華氏四五一度』を連想させる題名で、力強い。

学校図書館の司書は、学校図書館法が改正され、学校司書の存在が認められたとはいえ、いまだ正規、専任、専門とは言えない場合が数多くある。いや、公共図書館でも、司書は専門職としては扱われてこなかったものが、職員定数の削減、指定管理者制度などにより、正規という歯止めもあやうくなっているのが現状だ。非常勤の公務員につ

いては、一般職の会計年度任用職員の任用制度が作られ、地方公務員法と地方自治法の一部が改正されたが、はたしてどうなるであろうか。

埼玉県でも、学校司書が新規に採用されず、補充は臨時職員という事態が12年間も続いた。そこで、学校司書が立ち上がり、「埼玉県高校図書館フェスティバル」を開催し、埼玉県民に司書のいる高校図書館は楽しいということを伝えようとしたという。その結果、書店さんや出版社、はては著者ともつながりを作り、学校図書館の現状を広く伝えるのに成功し、新規採用も始まった。本当に、頭が下がる。地域の人とつながって問題を解決していこうという方向性がいい。これは是非とも参考にしたい。

しかし、木下さんとて、初めから何もかもがうまくいったわけではない。木下さんが学校図書館に就職して3年目には、学校図書館問題研究会の集会に参加したのをきっかけに、貸出方式の見直しに取り組んでいる。公共図書館でもフォトチャージング方式やブラウン方式など、様々な方式が試された時代があった(図書館問題研究会東京支部編著『みんなの図書館入門〈貸出方式篇〉』図書新聞発行が1982年)。現場での地道な取り組みの背景には、「資料提供をとおして、児童生徒が学ぶよるこびや読む楽しさを体験できるよう援助するとともに、すぐれた教育活動を創り出す教職員の実践を支える」(『学校図書館問題研究会綱領』)という信念が存在することを忘れてはならないだろう。

特に、印象深かったのは「学校司書にとっていちばん大切な仕事は、「選書」だ」という一言だ。公共図書館でも変わりはない。図書館という仕事の本質は共通なのだと思う。その土台の上に、授業で役立つ図書館であったり、ブックトークやブックリスト、ビブリオバトルなどの取り組みが花開いているのだ。

木下さんの仕事を参考にしながら、さまざまな図書館が連携し、地域の人たちとつながって、子どもたちのために、読む楽しさを伝えていければと願っている。(さかべ たけし)

国立国会図書館訪問記

池田 めぐみ

国立国会図書館とは

東京青山通り沿いに国会議事堂と最高裁判所に挟まれるように国立国会図書館があります。日本で唯一の国立図書館です。6階建ての本館と4階建ての新館の、2つの棟が2階でつながっています。

今回は、利用ガイダンスを受けて普段は入ることのできない書庫内の見学が出来るということで、期待を胸にやってきました。

学校司書という仕事について3年になりますが、実は図書館利用はあまり得意ではありませんでした。それは学生時代、レポートに必要な資料を図書館に借りに行き、期限までに手に出来ず、買ってしまったり、人の物をコピーさせてもらったりしたからです。それでも、近頃は読むための図書館利用が、インターネットのおかげでとても便利になり、家に近い地区センターに本を届けてもらい読書タイムを楽しんでいます。

さて、国会図書館は読書のための地域の図書館とは違い資料の館外貸出がないという事で近寄り難く感じたのですが、『図書館を知ろう』（調べ学習に役立つ図書館シリーズ1 ポプラ社）という児童用の本に、国会図書館を説明しているものがありました。その中に、その名の通り、①国会のための図書館である、②国会議員が調査をし、法律を作る為に準備手助けをする、③役所や裁判所に資料情報提供の図書サービスを行う、④あらゆる図書や記録を集めて国民に提供する、⑤日本の全ての図書館を代表して世界各国の図書館と図書館協力を行う、と記されています。最初は国会議員しか使えないのか?と驚き、最後は世界中の図書館とつながっているという記述に私もその一員…心に広がるグローバルな香りを感じて気持ちも上向きに、国会図書館にきました。

利用に際して

国会図書館で資料を閲覧するには利用者登録が必要です。何も知らずに入っていくと、案内の方が、新館の方で利用者登録することを教えてください。

そして新館に入ると案内の方が登録利用者カード作成の用紙を渡しながらか記入後の申し込みカウンターを示して教えてください。至れり尽くせりです。

この時、身分証明書が必要です。以前は20歳からしか利用できなかったのですが、2014年から満18歳以上で利用可となりました。高校生でも18歳になっていれば入館できますし、18歳以下の高校生でも図書委員で顧問の先生の引率があれば、見学の申し込みが出来るようになっています。

さて、利用者登録用紙を提出し、ものの5分ほどで呼ばれ、入館証を手に入れました。この時に渡される利用者登録証に、利用者IDとパスワードが記されています。これが全員違います。このパスワードを忘れては資料の閲覧が出来ません。図書館に入るにあたり、大きな荷物は持ち込めません。コインロッカーにカバンを仕舞い、録音、写真撮影は禁止なので、お財布、携帯、ノート等の貴重品必要最低限の物を、備えつけられたビニール袋に入れて持ち歩きます。くれぐれも、パスワードを記入してある利用者登録証をロッカーに仕舞わないように。

はじめての国会図書館は…

さあ、いよいよ入館です。高い天井に広い空間。入り口は駅の改札と同様に、カードでタッチして入ります。今日の目的、利用ガイダンスを受けて書庫を見学するツアーを申し込むべく案内のカウンターに直行します。時間は12時少し前。いつも定員いっぱいにはならないというお話だったので、14時からのツアーを申し込んで、6階の食堂を利用する予定でしたので、12時前の到着はなかなかいいタイミング、と思って声を掛けたところ、驚きの事実、なんと今日のガイダンスツアーはすでに定員に達してしまい、入れないとのこと。電話予約は受けていないので、と申し訳なさそうに一生懸命話してくださる受付の方に、こちらの方も申し訳ない気持ちに…。「今日に限って…」そんな歌があったなあ…でもせっかく入館したので、ここは予定を変更して国会図書館探索をすることにしました。エレベーターで食堂のある6階に上がり、ここから館内探索に向かいます。

階段を降りて、5階は立ち入り禁止ですが、会議

室や個室が20部屋程ある様子。4階官政資料室、3階古典籍資料室は許可制で申し込まなければ入室は出来ないの、許可がなくても入ることのできる地図書、科学技術・経済情報室を覗いてみました。海外からの資料も分厚いファイルにまとめられていて、時間が許せば興味のある人には宝の山ですね。

2階まで戻り、何か検索して資料を閲覧してみることにしました。

ここ国会図書館の膨大な資料の中には一つしかない貴重な物もあるはず。それらを持ち出して紛失…なんて大変な事です。そう考えると貸し出しは難しいのでしょうか。そのかわり、コピーを取ることが出来ます。もちろん、制限があり、コピー代もかかりますが、その流れを実際に体験してみます。まずは、資料を取り寄せるためにNDL-OPAC(国立国会図書館の所蔵資料の検索・申し込みが出来るシステム)で、キーワードを入力し、検索します。

出てきた関連資料の中からこれはという資料を選びます。一度に3点まで請求できます。わからないことがあれば、係の人に尋ねるとよいでしょう。書籍は本館カウンターで、雑誌は新館のカウンターで受け取ります。資料請求をして30分程度で書庫から取り出されてきます。

待っている間、利用者端末から離れても、確認用の端末がいくつかあるので、安心です。先にそろっ

た資料が雑誌だったので、新館カウンターに受け取りに行き、空いている机で資料を見ます。知りたかった記事を見つけ、早速コピーすることにします。

複写カウンターの端末で本のタイトルを選んで申込用紙を出し、カウンターに申込みます。この時もPC操作が出来ずにオロオロしていたところ、すぐに係の方が来て説明してくれました。よく見ていてくれるなど感心しました。

コピーを待つ間に、別の資料が到着したとの確認が出来たので本館へ戻り、資料を受け取り、内容を確認します。こちらも、良い内容の物が見つかり、複写カウンターに向かいます。本館の複写カウンターは、図書カウンターの裏側にあるので便利です。

新館は複写カウンターが下の階なので、本館に比べて不便な気もしますが、レトロな趣の螺旋階段を使うのもいいもので、すぐ側に喫茶室を発見、ゆっくりお茶もできます。喫茶室の手前のギャラリーには、図書館の歴史資料が展示されていました。

今回、ガイダンスは受けられず、見てみたかった書庫には入れませんでした。広くてゆったりしたこの空間で資料に目を通していた時間は至福のひと時でした。時間があればもっと資料請求してみたい、何故って、それは正に未知との遭遇。

どんなお宝資料が眠っているかわからない、この国立国会図書館へ足を運んでみることをおすすめします。(いけだめぐみ:小学校司書)